

征  
途

愛  
蔵  
版

目  
次

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

# 征 途

## I 衰亡の国

プロローグ——一九九五年八月一日

第一章 防人(さきもり)と軍艦

第二章 第三の死

ドキュメント——一九四五年春

第三章 落日

第四章 最後の嵐

## II アイアン・フィスト作戦

ドキュメント——一九四七年秋～五〇年夏

第五章 日本民主主義人民共和国

第六章 テト…密林

ドキュメント——一九八〇年冬

第七章 日常の間で

367 363 293 213 207 181 135 127 71 25 9

205

7

Ⅲ ヴィクトリー・ロード

第八章 ガルフ・ストライク

ドキュメント——一九九二年五月

第九章 祖国統一工作基本準備案・甲

第一〇章 統一戦争

エピソード 天の光——一九九五年八月一五日

661 617 539 531 409

晴れた日はイーグルにのって

665

佐藤大輔、『征途』を語る

707

「征途」文庫版解説

上巻 木俣正剛

中巻 押井 守

下巻 横山恵一

722 718 714

追悼インタビュー

小説を読むかぎり、佐藤大輔はそこにいる

押井 守

727

407

装幀 山影麻奈

征

途



I  
衰亡の国

「諸君は、私が今まで述べた所には、（もし）と（しかし）が余りに多すぎると言われるかもしれない……だが、戦争の実際問題を解く場合には、この二つが大きな役割を果たすのだ」

——アルフレッド・セイヤー・マハン（合衆国海軍少将 戦略家 1840～1914）

プロローグ——一九九五年八月二五日

## 発射準備手順

嘉手納宇宙港・沖縄県

一九九五年八月一五日

宇宙往還機の機長席についた彼は、公園のベンチに置き忘れられた玩具の熊の様だった。自分を抱き上げてくれる幼女がいなければ何の意味もない微笑みを浮かべ、夕日を浴びているテディ・ベア。黒い瞳はいつも優しく、まさにセオドア・ローズヴェルトが好んだ子熊そのもの——そんな印象を人を与える男だった。

実際、大抵の友人は彼のことを「クマさん」と呼ぶ。本人もそのあだ名がかなり気に入っているらしい。それが証拠に、現役戦闘機パイロットとしてF14JやFV11Jを飛ばしていた頃、彼のコールサインは「テディ・ベア」だった。

もつとも、そう呼ばれた時期の彼が「テディ」だったのは、地上にいる場合だけだ。コクピットにおさまった「テディ・ベア」は、中東と樺太でロシア人の造った航空機を一〇機も撃墜した正真正銘の野獣だった。

彼、海上自衛隊二等海佐・藤堂輝男は、ジェット時代初のダブル・エース・パイロットとして、空戦史にその名と功績が刻まれている男だったのである。同時に、戦場を飛ばぬ時期は実験航空団で無数の試作機を飛ばしてきたヴェテラン・テスト・パイロットでもある。

そう、藤堂輝男がNASDA——宇宙開発事業団の建造した宇宙往還機第一号機の指揮官に任じられた理由は、彼が世界で最も優秀なパイロットの一人であるからだだった。

宇宙往還機。彼が指揮を任されたこの機体は、これまでの宇宙機——ことにスペースシャトルとは全く違う性質の「宇宙船」と言える。

経済性を念頭において計画されたにもかかわらず、合衆国のスペースシャトルはロケット並の運営経費を必要とする欠陥商品だった。飛行の度に、使い捨てにされる部分が多すぎたからだ。それに、信頼性も低すぎた。

これに対し、宇宙往還機は、機体の完全再使用が可能だ。彼女は、かき水スラッシュのようになるまで冷やされた水素を推進材として、滑走路から通常の飛行機のように離陸。マッハ二五で大気圏外へ駆けあがる。

もちろん、地球への帰還、着陸も独力で可能。四千メートル級の滑走路さえあるなら、どんな空港からも離発着できる。使い捨てにされる部分は一切存在しない。

要するに宇宙往還機とは、通常の旅客・輸送機と同じ感覚で軌道飛行が可能な、全く新しい世代の輸送システムなのだ。言うまでもないことだが、軍用機としても使用できる。この機体は、積載されるパッケージと通信システムを変更するだけで宇宙戦闘・爆撃機に変身する。

藤堂輝男は、間延びして聞こえる声で言った。

「補助ターボ・ジェット、チェック」

「チェック、一番、グリーン」

「二番、グリーン。プリ・ランチング・チェック全項目終了。オール・グリーン」

「終了を確認。オール・グリーン」

彼は目を細めて、副操縦士と機関士に頷いた。

「さて諸君、いよいよ本番だね。まったく、緊張しちゃうな」

だが、言葉とは裏腹に、その顔には緊張のかけらも浮かんではいない。目と口元は、どこまでもクールだ。

航空自衛隊の攻撃機乗りだった副操縦士とNASDA飛行試験センター出身の航法機関士は、そんな

指揮官の様子を見て、精神を縛り付けていた糸の緩む感覚を味わった。

若い乗員二人——とはいっても、自分自身と五歳も離れていない——がリラックスする様子を確認して安心した輝男は、中央管制センターとの直通回線に報告した。

「コントロール、こっちは準備完了だ」

一九八〇年代を迎えて、合衆国に次ぐ宇宙大国として浮上した日本にとって最も困った問題は、国内に（彼等にとつての）ケープ・ジャクソンカナヅクエラールが存在しないことだった。

五〇年代以来、日本の宇宙開発——ことにその最終的局面であるロケット発射と衛星の制御——は航空宇宙研究所系の場合、大隅半島おおすみ、NASDA系の場合、種子島たねがしまで行われてきた。

しかし、八〇年代中盤になると、宇宙開発がNASDAに統合されて大規模化した結果、その運用面で難しい問題がでてきた。これまで使用されてきた九州南端の発射地ではスケールの社会的・今後の需要を満たせないことが明らかになったのだ（種子島に至っては、漁業権問題のおかげで発射時期が制約される始末だった）。

現状のままでは、新生NASDAの抱える巨大プロジェクト——軌道実験施設計画、発電衛星計画、宇宙往還機計画——を実施する過程で、困難な事態が発生することは確実だった。来たる二一世紀のナショナル・プロジェクトとして急速に具体化されつつある軌道植民地計画プロジェクトライジングサンに至っては、実験を行うことすら難しい。

NASDAは躍起になって代替地を捜し求めた。だが、日本国内でロケット発射に向けた土地がそう簡単に見つかるはずもない。

九〇年代に入ると、合衆国から返還されたカテナ基地とその周辺施設群にNASDAが飛びついた理由は、それだった。彼らは、日本国内でこれほどの規模を持った施設が手にはいる機会は、二度とない

ことを知っていたのだ。

NASDAは、ありとあらゆる抵抗を押し退けてカデナ取得に邁進し、それに成功した。

そして、膨大な予算を投入し、この軍事基地を徹底的に改造し、拡大していった。七〇年代後半、偵察衛星J・バード・シリーズが打ち上げられて以来、野党勢力御得意の貧乏臭い主導権争いの下で展開されていた。宇宙の軍事利用反対といった類いの市民運動を押しさえ込み、同時にカデナの基地機能を欲しがった防衛庁の横槍をかわしながら――。

努力は報われた。驚くべき事に、冷戦時代、極東最大の軍事基地といわれたカデナは、わずか四年で完全な宇宙開発施設につくりかえられてしまったのだ。

一九九五年のこの日、カデナ――いや、嘉手納宇宙港から世界初の実用宇宙往還機が飛び立とうとしている理由は、以上のようなものだった。藤堂輝男二佐は、日本がこうした紆余曲折を経て結実した事態の最前列に立つ、もつとも新しい輝ける存在だったのである。

輝男の乗る宇宙往還機（古い呼称では、スペース・ブレン）は、宇宙港にある元の主滑走路上でゼロ・アワーに備えていた。機体は滑走路から旧弾薬庫地区にかけて設置された全長六キロの超電導発射システム、マスコミのいう超電導カタパルトの始点で待機している。宇宙往還機は自力で離陸できることが建て前だが、燃料を使わずに初期加速できるに越したことはないと考えられたのだ。

当然のことながら、この飛行は、世界から注目されている。各国の報道陣は、一週間ほど前から基地の周辺をうろつき、取材合戦を繰り広げていた。発射当日の今日は……もちろん、プレス席の端から端まで、カメラの砲列で埋め尽くされている。そして、多種多様な言語による衛星中継放送は、宇宙港周辺に祭のような雰囲気醸し出していた。

この祭に参加しているのは彼らだけではなかった。総計数千にも及ぶマスコミ関係者に加えて、世界

中から集まった三〇万を越える見物客が、この新世代宇宙機の初飛行を一目見ようと、宇宙港周辺へ押し寄せ、全国から結集した警備の機動隊に給料以上の仕事をさせていた。

巨大な映画館の様な超大型ディスプレイが設置された宇宙港の中央管制センターでは、見物客の公的代表団と操縦士たちの親族が招待されていた。

代表団のいる場所は、巨大なスクリーン型ディスプレイがいちばんよく見える貴賓席だった。透明の強化プラスチックで四囲を囲まれた席で、映画館で言えば特別指定席の位置に設けられていた。座席の数は二〇ほどだ。これに対し、管制官たちが実務を行う三〇近いCRTディスプレイ付き制御卓は、一階普通座席の位置にある。

「確かに、X30は大変な悲劇でした」

NASDAの広報担当官は貴賓席に座る人々に言った。丸々とした顔に（広報担当者特有の）信用のできない笑みを浮かべている。

広報担当官の横にある四〇インチ・ハイビジョン・ディスプレイには、空中で突如コントロールを失って横転する機体が映っていた。画面にCNNやNASAのロゴが見えないところをみると、NASDAが独自に撮影したものらしい。

広報担当官は画面を指さし、悲しげに言った。

「アメリカの宇宙計画に与えた影響からすると、シャトル・コロンビア以上です——なにしろこいつは、都市部におっこちましたからね」

ディスプレイに映された機体は、空中で激しくのたうち、細かな部品をばらまきつつ落下していた。鯨の胴体後ろ半分を切り落とした様な印象を受けるスタイルだ。いや、カヌーを中央から断ち切ったスタイルに近いといふべきかもしれない。

「まあ、宇宙計画反対論者の方には意外かもしれませんが……現在では、X30の機体設計に誤りは無かったと考えられています。リフティング・ボデイはずいぶん以前からある概念ですからね。問題は……」

「どうも……」

「作業段階にあつたようだ、というのが向こうでの見方です」

「カンサス・シティじゃそうは思っていないわよ」

反論の主は、三〇代らしい、美人だが余裕のない顔つきをした女性だった。胸につけた訪問者用のプレートに、宇宙軍事利用阻止国民同盟と記されている。見物客の公的代表の一人だ。

「確かにそうです」

広報担当官は頷いた。彼は、ここで反宇宙開発論者から文句をつけられることを最初から予想していた。合衆国の宇宙往還機——X30のカンサス墜落は、それほど大きな事故だったのだ。

彼は茶化すような口ぶりで言った。

「カンサスじゃ何千人も亡くなつたし、現在もアメリカの宇宙計画——特にX30関連は停止状態です。いくら、お家が一番でも、赤い靴のかかとを合わせる時に、力を入れすぎたんすな」

「だからこそ、我々は——」

彼のひどい冗談の意味がわからなかつた女性は、発言の前半に対して反論をしかけた。

広報担当官は彼女の発言を軽く手で遮り、

「ああ、後にしてください」

と言つた。内心では、こういう連中は何かを言うときどうして、私は、でなく、我々は、になるんだろう、そう考えている。

「そちらの、ああ……なんとか国民同盟の女性かたが言われる通り、確かに事故の危険はゼロじゃありません。しかし、あの——」

広報担当官は、超大型ディスプレイに映し出された鶴のように優美な宇宙往還機を指さした。

「機体は、エイト・ナインズの安全率で設計され、テストされてきました。つまり九九・九九九九九九パーセントの安全性ですな。これは無茶なスケジュールで運航してる航空会社の旅客機より一桁安全なことを示しています。我々が宇宙往還機は、世界一事故率の低い飛行機なんです」

そこまで言うと、自分の言葉を全員が理解できるよう、故意に言葉を止めた。聴衆に、宇宙往還機がロケット的な（そして危険な）イメージの強い「宇宙船」ではなく、日常的な安心感のある響きを持った「飛行機」であることを理解させようとして。

実際、この点については、広報担当官の言葉に嘘はなかった。宇宙往還機は藤堂輝男の指揮によって、プロトタイプの0号機を含めば、過去三〇回以上の大気圏内飛行テストを行っている。その間、マツハ二〇を越えた時でさえ深刻な問題は発生していない。

もちろん、新しい技術を実地に運用する場合の常として、無数の不備は見つかっていた。しかし致命的なものは存在しておらず、現時点までにそのすべてが改修されている。大気圏外では別の問題が出てくるかもしれないが、こればかりは実際に飛び出てみないとわからない。いまのところ、隕石の衝突か異星人の攻撃でもない限り確実に帰還できる——そう予測したNASA飛行試験センターのコンピュータ・シミュレーションを信頼するしかない。

聴衆の表情を冷静に観察していた広報担当官は、頃合を見計らって、再び口を開いた。彼が言ったのは宇宙往還機についてNASAが人々にアピールしたがついてる殺し文句だった。

「以上のようなマン・マシンのファクターを結実させ、今日、彼女は宇宙へと旅立つわけです。ちょっとばかり下品なセリフでいわせてもらえば……二一世紀日本の夢を乗せて離界するのです！」

広報担当官の言葉はお世辞にも感動的とは言えなかった。だが、彼らのいる場所は世界で唯一の宇宙港だった。ディスプレイにはペンシル・シリーズ以来、嘗々と築き上げられてきた夢の実体が映し出さ

れていた。

自然発生的な拍手が湧き起こった。そのとき、

反宇宙開発論者の女性が、叫んだ。

「夢？ いったいどんな夢なの？ アメリカのかわりにSDI計画を進めるためなのに！」

彼女は眉をつり上げて叫んだ。政党に主導された市民運動の過程で、宇宙という言葉を目にするだけで血圧があがるように条件づけられてしまった彼女にとって、拍手は激怒の原因以外の何物でもなかったのだ。

「SDI？」

広報担当官は心底不思議そうな顔をした。

「とほけないで！ あなたたちの企みはわかってるんだから！」

「どういふことでしょうか？」

「あなたたちは宇宙に軍人を送ろうとしている。彼らは人殺しよ！ 機長は戦争で二〇人以上も殺しているわ！ 副操縦士だって！」

その叫び声は、彼女が尋常ならざる精神状態にあることを明らかにしていた。

「おっしゃっている意味がよくわかりませんが……」

広報担当官は給料によつて支えられた職業意識で冷静さを保ちつつ続けた。

「宇宙計画に自衛隊のパイロットが参加していることを指摘なら、お答えします。彼らを選ばれたのは厳しい訓練や任務に耐え得る体力と知力を備えた人材だからです。軍人がダメだということなら、ガガーリンやフレンドシップ・セヴンはどうです？ 彼等がいなければ、人類は未だに地球上だけをうろついていたことでしょう。それに——これは断言できますが、先陣が軍人であったとしても、商業飛行が可能になった暁には、星の世界は人類共有の財産になります。アメリカのスペースシャトルがそ

れを証明しています」

彼は微笑むと、これは私事ですがとことわって、つづけた。

「それに、軍人、は往還機のクルーだけではありません。私も同じです。これでも、陸自の予備役一尉でしてね。湾岸戦争と統一戦争の時は大砲射ってました。たぶん、藤堂機長より私の方が殺した人間の数は多いんじゃないかな。確かに楽しい思い出はありませんが、私は自分を、人殺し」とは思いませんよ」

それを聞いて、女性運動家はますます怒り狂った。どうにも手の付けようがない。

怒りを正面から浴びせかけられ、広報担当官は「万策尽きた」という言葉の意味を実感していた。彼は思った。反対派の幼稚な反論を利用して、ニュートラルな連中に宇宙往還機の安全性を納得させるつてのは、悪くないアイデアだったのに。

彼が警備員を呼ぶことを決断しかけたその時、落ち着いた声が響いた。

「お嬢さん」

とりたてて特徴のある声ではなかった。だが、この声の底には明確な何か——他者に自分の意志を伝え、それを確実に実行させ続けてきた者だけが持つ力が存在していた。

「？」

「お嬢さん」と呼びかけられた女性は眉を吊り上げたまま、声のした方向を振り向いた。

口を開いたのは、貴賓室の隅にある席に座っていた初老の男だった。見事な銀髪を辛うじて七三にわけられる程度にのばし、背は高くないが、がっしりした印象を与える体格の持ち主だ。やや丸みを帯びた顔が、どこか他者に微笑みを浮かべさせたくなるのは、その目鼻の配置のせいだろう。膝には、三歳ばかりの幼女が行儀よく座っている。両隣には、妻と思われる初老の女性と、幼女とよく似た顔立ちの中年女性が座っていた。要するに、周囲には何の印象も与えない、好々爺直前の年金生活者のように見

える男だった。

声だけが、その印象を裏切っている。

「少し落ち着かれてはどうか。あなたがここで何を叫ぼうと、あれはもうすぐ飛び上がってしまうのだからね」

「私は主張すべきことを主張して——」

「それは大変結構！　だが、ここは政治討論を行う場所ではない。あなたが今為すべきことは、より適確な意見を述べるために、この打ち上げの一部始終を見守っておくことではないかね？　お願いだから今は口を閉じ、腰を降ろしなさい」

言葉や顔つきは穏やかだったが、それは紛れもない命令だった。

女性は凍りついたような顔になって黙りこみ、周囲から痛いほどの視線を浴びているのを自覚した。唇をきつく結んだ彼女は、何度か男の方に視線を向けたが、その度に、彼から発散している空気——経験によって形作られた人格的迫力——を浴びせられ、結局、何も言わぬまま肩を落とした。

室内に安堵の空気が満ちた。

この数分間、事態の傍観者となっていた広報担当官は、初老の男の視線を感じて、職務を思い出し、口を開いた。内心の動揺を隠すためだろう、不必要なまでに明るい口調だ。

「それでは、テイクアップ発進——我々は往還機の場合、リフトオフ発射とは言いません——まであと三〇分となりましたので、御希望の方を屋上の観覧席まで御案内したいと思います。もちろん、こちらで見学なさっても結構です」

そう言われても、最初は誰もが決めかねている様子だったが、

「では、お願いします」

と、先ほどの男性が立ち上がると、それにつられて一〇人ほどが立ち上がった。反対派の女性は座り

込んだままだ。

広報担当官は入り口近くで待機していた部下に後を任せると、中央管制センターが入っている宇宙港中央ビルの屋上へ希望者を引率した。

屋上に向かう途中で、彼は、先ほど事態を丸く収めてくれた男の横に並んだ。そして、小さな緊張した口調で感謝の言葉を伝えた。

「有り難う御座いました、提督」

「気にしなくていい。私は、昔からああいいう手合いの扱いは慣れている。あのような人間になったのは本人の責任ではない。精神の自立以前に、知識だけが詰め込まれたことが原因だ」

提督と呼ばれた人物は、かすかに聞き取れる程度の声で答えた。彼の口調には僧侶にも似た柔らかな響きがあった。

広報担当官は全身に冷や汗が吹き出していた。統一戦争の際、大きなミスを犯した自分を叱責した上官も同じ口ぶりだったことを思い出したのだった。

その上官は、彼のミスを洗いざらい指摘した。しかし、戦争が終わって、そのミスの責任を被ったのは、彼を叱責した上官だった。その結果、確実視されていた陸将補への昇進を諦めねばならなくなっても、責任はNASA職員のパートタイムオフィサーにあるとは言わなかった。数年前に一佐で退役せざるをえなくなったその人物の事を、彼は忘れてはいない。いや、忘れられるわけがなかった。

いま、彼はかつての上官に対して抱いている感情と同質のそれを提督と呼んだ男に感じていた。本物のオフィサーに対する、尊敬とも羨望ともつかない感情だ。

同時に、内心の対極には、だからこそ俺はNASAの広報担当官になれたんだという開き直りに近い自覚があった。いつも陽気な笑みを浮かべ、ちよっとした冗談で周囲を笑わせるのが好きな自分。そんな自分が、本業の士官に向いているはずがない、そう思っている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。